

スポーツ競技の倫理的価値に関する課題

A Study of ethical value of Sport

杉田文章*
Fumiaki SUGITA

キーワード：スポーツ、社会、倫理、スポーツを通じた社会化

Keywords：Sports, Society, Ethics, Socialization through Sports

はじめに

本稿は、観光・レジャーやスポーツが一定の経済要素として扱われる今日において、スポーツが人間や社会に与えると期待される倫理的、教育的価値について考察した上で、スポーツ競技の現場の状況を鑑みてその価値実現の課題について整理を試みるものである。

スポーツ文化が持つ価値、社会的機能をどのように捉えるか。

スポーツ振興法に代わる形で制定、施行されたスポーツ基本法は、その前文で、スポーツの存在意義や価値について述べている。そこでは、心身の健全性、健康・体力などの「健全な生活の基礎を形作る文化」として評価し、さらに、他者の尊重、協同の精神の涵養、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心の養成、実践的な思考力判断力を育む、などとしており、人間形成の手段としての有用性についてうたっているのである。さらに社会的機能として、国民の統合機能、誇りの醸成、国際的地位の向上にもつながるものとしてきわめて積極的な評価を下している。

すなわち、スポーツ基本法は、人間の心身の健全性を確保、拡充する文化装置としての価値を高く評価するとともに、社会構成員としての個人の在り方、倫理の源泉と位置づけ、それらを総合して、教育的価値につなげているのである。

スポーツという文化が持っていると思われる価値、機能についてさらに視線を広げてみるならば、これらのような公的な認知に加え、代償行為の対象としてのスポーツの持つ機能（つまりは、社会的不満のはけ口としてのトランクリライザー的機能）、あるいは社会的上昇の手段としてのスポーツ、などというとらえ方もあるであろう。

これらのように、スポーツには非常に多岐にわたる価値が想定され、人間社会の実相と深く関連しながら推移していると捉えることができる。

しかしながら、後にも述べるように、1984年ロサンゼルスオリンピックにおける商業主義的イベントとしての成功に端を発し、スポーツは実社会の経済的側面との結びつきを非常に強くすることとなり、スポーツの領域の中での「勝利」の持つ意味が大きく変貌するとともに、

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

非常に大きくなっていった。今日スポーツが存在していることの価値は、上にあげた多岐にわたる価値、機能を果たす手段的スポーツとしての価値というよりは、経済価値という一つの価値追求手段としての存在理由ばかりが肥大化したことは否めない。昨今話題となっている高校や大学運動部などにおける指導者による体罰、ハラスメント等の問題についても、その根底にはまさに「勝利の価値」の肥大化がある。Guttman¹によればスポーツは勝敗を伴う身体的ゲームであるが、これも「プレイ」（遊び）の範疇のことであるはずであった。「肥大化」とは、その「勝敗」が「現実社会から隔離され限定された空間と時間の中のできごと」から、現実社会における（とくに経済の）価値に直接結びつくものに変貌したことそのものを指していると考えることができよう。

ピーター・ユベロス氏によるオリンピックの営業的成功から約40年を経て、商業主義化によって助長されたスポーツ価値観は、トップアスリート競技から底辺の大衆スポーツまで、また、年齢層等にも関わらずスポーツを広く覆ったと見ることができる。

2022年、公益財団法人全日本柔道連盟が発出した全国小学生学年別柔道大会の廃止決定は、たとえば高校野球における投手の投球数制限ルールの追加や延長戦の方法変更など、身体的なリスクを回避するという目的のルール変更とは全く意味合いを異にするもので、スポーツが持つ多様な価値のバランスが崩れ、勝利のみが突出しているとの反省を反映している点で大きな意味を持っており、このような組織的決定を生み出す所こそ、スポーツの倫理性を確認することができるのだともいう注目されるべき出来事と考えられる。今後、このような観点からのスポーツの在り方についての検討が他の種目などにも広がるかどうかについては、注目を要する。

「俗とスポーツ」の時代におけるスポーツ倫理

スポーツは、もともと「聖」「遊」の領域の文化であって、現実＝「俗」の世界とは切り離されたものとしての価値を有していたと考えられる（例えば松田²）。昨今まで残る「アマチュアリズム」なる見方の根本にも、形而上学的ともいえる、「俗」とは異なる次元での人間的価値につながっていることがメタメッセージとして込められてきた。古代オリンピックが小国家間の戦争を休止してまで行うものであったということ、近代オリンピックにあっても長い間プロスポーツ選手の参加を認めてこなかったということなども、このことを示していると言えよう。

しかし1984年にピーター・ユベロスらによってスポーツ界の頂点ともいえるオリンピックイベントの在り方が転換したことを起点として変動が始まった。1992バルセロナ五輪における男子バスケットボールドリームチーム参加に象徴されるように、「アマチュア」という概念は崩れ、テニスやゴルフ、野球等の競技においても、オリンピックゲームズは、プロ選手たちが出場を目指す存在に変貌した。

プロ選手たちの登場によってより競技として高度化したオリンピックは、巨額なスポンサービジネスとしての様相を呈し、「コンパクトな大会」を標榜したオリンピックパラリンピック2020東京大会であっても、大会エンブレムをめぐる問題や国立競技場建設に係る政治的・経済経営的論争を経て、世界的パンデミック下での一年延期の上でその是非が議論する中で開催され、現在（2022年9月現在）では、スポンサー契約の違法性をめぐって捜査が行われている。

¹ アレン・グートマン「スポーツと現代アメリカ」TBSブリタニカ, 1981

² 松田恵示「遊戯（遊び）とスポーツ 一遊戯論の展開に見られる遊びの文化社会学的考察一」大手前女子大学論集, 1991

本稿は、これらについての是非を問うことを目的としていないが、こういった出来事に加えて、新たに採用される種目の選定、男女による種目の調整など、スポーツがいかに関与するメディア価値ひいては経済的な価値を維持するための試みを積極的に行っていることが見て取れることについて指摘しておきたい。これはスポーツ界の頂点であるオリンピックにおける出来事であるが、大きく広がるすそ野のスポーツへの影響も少なくない。

もともとスポーツ（上で述べたところの「アマチュア」にあたるスポーツ）は、「俗」から切り離された領域であり、であるからこそその中に醸成される価値観は、現実的な状況（とくに経済）に強く影響されずに存在し得た。

例えば、ゴルフは、基本的に審判のような存在を前提としておらず、自らが自らを判定しなければならないと規定する。そもそもゴルフはそのルールの中に、自然環境のもとで競技者が願っていない出来事や結果に翻弄されながらも自分のあるべき態度を保持しなければならないという「困難性」を意図的に用意しており、根本的に「人間性を試す」要素を引き入れている。スコアをごまかすことがいくらかでも可能な状況のもと、自分自身にしかわからない出来事に対して自分で判定し、正直にスコアを申告することが求められる（「ゴルファーズオネスト」）。スポーツ競技として参画者は勝利を目指すのであるが、同時にこのような「倫理性」を付随しているところにゴルフ競技の特性がある。

日本の武道にも同様の倫理精神がそなわっていることも、明らかである。儒教思想を背景に、「礼に始まり礼に終わる」「相手や周囲への尊重、尊敬」「死生観」と深く結びついた倫理的なあり方を重視する武道は、「外部に存する規範の内面化」とは一線を画す「自己の内部を見つめ深める方法に基づく自己形成」過程を包含しており、人間としての在り方を形作る人格形成機能を持っている、と考えることができる。

また、サッカーのゲーム中に負傷した選手が出た場合にボール支配権を一旦放棄し、再開時に救護をサポートされた側がボール支配権を一回相手に渡す（戻す）暗黙ルールがあることはよく知られていることである。

これらからは、「聖」「遊」の領域にあるスポーツでは、勝敗を決する、ひいては「勝利を目指す」よりも優先される価値が共有されていることが見て取れる。そしてこれは、単なる「勝利追求の放棄」や「限られた資源を取り合うゼロサムゲームにおいて、その資源を相手に差し出す単なる利他行動」ではなく、勝利よりも象徴的かつ重要な価値を実現するための行動と捉えるべきである点が重要である。このことについて広瀬³は、スポーツをすることの前提として、スポーツに価値があること、勝利に価値があることが前提で、その価値はルールを守らなければ保持できず、「スポーツはするけれど、スポーツマンシップは守らない、ということは原理上不可能なこと」とし、相手と秩序を尊重する覚悟をもつことによってはじめてスポーツをし、勝利を目指す意味が生じるのだと指摘している。スポーツに、特に倫理的教育的価値が込められているわけではない。しかし、このルールを参加者が共有し大切にすることによって競技全体の「楽しさ」の価値が生みだされていることに気づくのであるから、自分を含めた参加者全体がこの見解を共有し大切にしようとするところにはじめて「楽しさ」というプレイとしてのスポーツの根源的な価値が実現されるという合意があることは、非常に大切である。」というふうなスポーツの価値とスポーツマンシップ教育との連関について述べている。

³ 広瀬一郎「『尊重』と『覚悟』を生むスポーツマンシップ論」小学館,2010

このように、「俗」とは一定の距離を置いた倫理性を伴ってきたスポーツであるが、社会の様相の変化に伴って、スポーツの様相も大きく変わってきた。拙稿⁴にもあるとおり、私立大学の入学者獲得の一手段としてのスポーツ推薦制度の拡大と、これに呼応するかのようにスポーツ活動を継続することを主たる目的として大学に進学するケースの拡がりなどは、まさに、「俗」としてのプロスポーツに進むか、それとも「聖」「遊」としてのスポーツを大学でも継続するか、という二者択一ではもはやない競技スポーツ継続の形が目につくのである。職業としてスポーツを行うということではない。しかし、だからと言って「聖」の領域のスポーツに浸るといっていいわけではないのである。そこでは「何のためにスポーツを継続するのか」という目的はもはや明確ではなく、いわば「スポーツ活動を継続すること」自体が目的化している。こういった変化に呼応するかのように、いわゆる伝統的なプロスポーツとは異なる形で、大学卒業後もフリーライターやそれに準じるような形での労働と並行して、スポーツ活動が継続できるような受け皿としての組織、チームも増加しているように見受けられる。

これらを概括するに、スポーツ活動を継続することは、活動者本人にとって、その競技レベルの高さや報酬の大きさに関わらず、人生の中でより中心的、より重要なものになっているように見受けられる。逆に見れば、どのような職業に就くことが幸福なのか、あるいは生活基盤となる収入をどう獲得するか、という課題は、その重要性の順位を下げている、最低限の収入確保のもとでスポーツ活動をできるだけ長く継続しておきたい、という要求がより高まっているように思われるのである。

この状況の是非について、軽々に判断することはできないものの、これらの現象が何を意味し、何に着眼し、留意することが肝要であるかについて、注目し続ける必要があるものと考えている。今回は、これを倫理、規範に対する態度形成の観点から考察し、「俗」化したスポーツの現実を踏まえた上で、スポーツ文化がその機能役割を十全に発揮できるように必要な課題抽出を試みようとするものである。

スポーツを通じた教育における倫理と人格形成をめぐる検討課題

スポーツ活動の体験が、活動者の思想、心情、態度、行動に何らかの影響を与えることは想像に難くないし、であるからこそ、教育過程に体育が組み入れられ、またスポーツクラブの存立が期待されていると解釈できる。

しかしながら言うまでもなく、スポーツをしさえすれば望ましい人格形成が果たされると考えることはできない。社会の倫理秩序形成とスポーツをめぐる課題点について数点指摘しておきたい。

(1) スポーツ世界が範囲拡大し、同時に聖域化する中では、スポーツ活動を通じて望ましい社会規範を内面化するというプロセスではなく、スポーツの中だけで通用する権威主義、経験主義を内面化するプロセスにすり替わってしまう恐れがある。

スポーツ活動を通じて規範を内面化する（社会化）過程については、スポーツ参与者とくに子どもや若者時代には、主体的能動的に規範の正義を判断、取捨選択することは難しく、「形から入る」「まずは言うことを受け入れる」という形となりがちであろう。その際に実績のある著名なスポーツ指導者、伝統あるチーム、といった「権威」がこれを助長する。

⁴ 杉田文章「教育とスポーツをめぐる今日的課題に関する一考察」多摩大学経営情報学部紀要 no.23, 2019

格技等においても、「型」が大切にされる世界の中で、なぜそれが美しい（価値がある）かについて、参与者自身の理解が形作られることが大切である。ゴルフマナー研究者である鈴木康之は、ゴルフにおける「マナー」がどのように生成され、なぜ大切であるのかについて丁寧に説明を試みている⁵。これはゴルフの教育啓蒙書と評することができるが、プレーヤー本人が主体的に規範を理解し、遵守することによってゴルフというスポーツの本質的な価値を体現するという方向に「啓蒙」する点において、重要な役割を果たしていると言える。

(2) 「勝敗かそれ以外か」という二者択一の価値判断からの脱却の課題

上杉⁶は「禁欲性－即時性」と「自己目的性－手段性」の二つの軸からスポーツ価値意識の4類型（アゴン型：禁欲×自己目的、世俗内禁欲型（禁欲×手段）、レクリエーション型（即時×手段）、レジャー型（即時×自己目的））を提示した。この類型を基に、木村⁷らは、スポーツ価値意識という概念からの社会学的考察の貧困さを指摘し、「する」だけでなく「見る」「支える」スポーツをも含んだスポーツ基本法以降の我が国のスポーツの価値の創出課題に応える研究の必要性について言及している。「見る」「支える」スポーツ参与の形が意識されるとき、そこには、勝利の共有という価値もありながら、一方で、ある集団に属する一員であることの喜びを感じる事がクローズアップされる。巨人大鵬の時代とことなり、強いから応援するのではなく、地元だから、同世代だから、といった理由で、競技成績が低くても献身的に応援するというスポーツ参加は非常に成長しており、バスケットボールリーグ、フットサルリーグなどを始めとして、多くのローカルなクラブが成立するに至っていることは、注目すべきことである。

しかし今日、スポーツが経済的に価値あるものとして存続をはかり続けなければならない条件下で、高度経済成長期の産業社会の価値観と決別できる段にあってもなお、勝利至上主義的な価値観から脱却できずにいることは、もともと持っているスポーツ文化の（勝利以外の）広範で潜在的な価値の出現を妨げているおそれがある。しかし逆に勝利へのあくなき追及を否定すればスポーツそのものの価値の構造を毀滅するであろう。安易に「反勝利主義」に陥らず、同時にそこから多様な価値を実現していくビジョンを持つ必要がある。

このことは、自由資本主義経済が共産主義的経済世界観との覇権争いの後、まさに「勝利至上主義」のもと金融資本主義、さらにはデジタル資本主義と変遷する中、原点回帰としての経済の「済民」価値への着目という観点からの見直しの議論が起こっていることとも符合するように思われる。スポーツは、かつて、戦争を中断してスポーツの祭典を開いた時代の役割をふたたび期待されている。今日の勝利至上主義に染まる経済の一アイテムとして利用されるのではなく、むしろ経済や政治の現実社会に対してより大きなビジョンを提示する役割を果たすだけのポテンシャルと価値を持っているとの仮説に立った展開を構想するべきではないかと思われる。

(3) スポーツをめぐる昨今話題の一つは、「部活動の学外への委託」の文脈である。議論そのものは、顧問教員の労働負担をどのように軽減するかという論点からと思われるが、外部の指導者に部活動の指導を委託することがもたらす変化、影響は大きなものであることが予想できる。この変化を求める意見のもとには、スポーツの専門性を持った指導者による指導によっ

⁵ 鈴木康之「ピーターたちのゴルフマナー」ゴルフダイジェスト社, 1999

⁶ 上杉正幸「大学生のスポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析」体育スポーツ社会学研究6, 道和書院, 1988

⁷ 木村和彦「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発—第1報—」平成26年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅱ

て、全体の競技レベルが高まることへの期待が含まれていると考えられる。スポーツに取り組む中で、競技レベルは向上したほうが望ましいということに議論の余地はない。しかし上に述べたように、レベル向上、勝利の価値の更なる拡大の一方で、失われるものがないのかについて注意する必要がある。それは、autonomy（自立性）についての課題である。「部活動は、生徒たちが自ら考え御する数少ない活動」との指摘があるように、本来の遊びとしてのスポーツが持っていた、限定された時間と空間における自己完結的な活動という側面によって、自己決定のプロセスを体験することができるというスポーツ活動の利点は、勝利という外在化した目標とそれに向かう組織化された活動によってかき消されることはないのか。競技レベルを高め、またより高い競技戦績を得るためには、専門的指導者の指示を受け入れて自己決定のプロセスを省くことは致し方ないことであるのか、という点について、洞察していく必要があるように思われる。

(4) 総じて、スポーツ活動を通じて気付き、自らのものとするような「倫理」はどのように形成されているのかについては、よく検討される必要がある。スポーツが課してくるルールその他の規範と、そのもとでの勝利追求の中で生ずる困難の受け止めと克服が、スポーツをするものの人格形成をもたらすのであるならば、重要なことは、スポーツ（の場における様々な制約、困難、葛藤）が、競技に触れる生徒たちを育てるのであって、指導者はその介助者に過ぎない、という点を銘記することが求められるであろう。指導者や更にその周辺にいる関係者の役割は、スポーツの場に身を置くことで成長することを、どこまで促進できるか、という協力と支援ということになる。倫理は、外部から「このような態度をとるべきである」と「指導」されて身に着けることができるものではなく、あくまで自身で葛藤を体験し、自分の在り方についての自己決定の過程をふまずには完成することが難しいものである。このような視点から、スポーツ指導の在り方、スポーツ指導者養成の在り方について、再検討を試みる余地があるのではないかと考える。

以上、スポーツを通じた成長、人格形成の課題について、今日のスポーツの様相を踏まえて、倫理規範の内面化過程の面からの課題抽出の試みを行った。今後、このノートを基盤として、具体的な研究課題の提出につなげて行きたいと考えている。